

巻 頭 言

学習論に基づく学校教育への転換がますます求められている今日だが、その思想的・実践的源流の一人であるデューイは、今からちょうど 100 年前の日本に足跡を残している。後に大正新教育運動と呼ばれるようになる当時の教育改革のうねりは、学校・教室とアカデミズムとを結びつけながら様々な成果を生み出し、戦争の時代を越えてその遺産が私達のもとへと届けられてきている。もちろんそこには、忘却せず受け継いでいこうと努力してきた先人たちが存在している。デューイが指摘したように、教育とはまさに伝達であり共有であるということを、あらためて実感するところである。

そしてデューイがこのことを指摘した主著のタイトルにも掲げたように、私達が教育を通じて何を指すのか、いかなる社会の実現を目標とするのかは、教育を担う実践者・研究者がつねに自らに向けるべき問いである。私達は一人ひとりが自他の生を尊重しつつ社会の構成員としてこの社会の存続・改善のための責任を負い、未来の構成員を教え育み、社会が抱える課題の克服へと世代を越えて協働していく。その連なりをこれからも分断させたり硬直化させたりすることなく、さらに強靱かつ柔軟なものへと発展させていくために、私達は子どもを通して人間を理解し、またそのことを媒介として私達自身の在り方を批判的に検討し続けなければならないだろう。

そのような自覚にも基づいた「学び」についての探究の成果を発表・交流する場というのが、『学習開発学研究』が果たすべき役割のひとつである。第 12 号を迎えた本研究紀要ならびに編集主体の学習開発学講座の発展のため、皆様から忌憚のないご意見ご批判を頂戴できれば幸甚である。

平成 31 年 3 月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任
編集委員長 山内 規嗣